

Casa del Quartiere San Salvario トリノの地区の家（サンサルバリオ）

歴史的建造物である公衆浴場を改修してつくられた，地域住民の活動の場

【キーワード】

〔施設種別〕高齢者施設 障がい者施設 子ども施設 住宅（住宅型ホテル） 地区の家，他
〔運営主体〕市区町村 法人 NPO 個人 社会的協同組合
〔建物形式〕1棟単体型 複数棟集合型 団地型 集落
〔建物状況〕新築 増築 改修 一部改修 既存
〔対象者〕高齢者 障がい者 子ども ファミリー 多世代 移民



サンサルバリオ地区の家の外観

トリノ中央駅の南東に位置する旧市街地に立地する地区の家。地域住民にとっては民設の公民館のような位置づけで，運営するアソシエーションから見ればオープン・オフィスのような方法で地域住民に活動の場をごく安価に提供している。住民の主体的な活動の場として利用されたり，各種の講座が開かれるなど活発に使われており，地域コミュニティの繋がりを改めて結び直すための拠点となっている。

視察月日 11月6日

記録担当者 西野辰哉，加藤悠介

案内者 アンドレア・ボッコ氏（トリノ工科大学教授，社会的協同組合スミズーラ代表）
多木陽介氏（通訳）



写真1 サンサルバリオ地区

同地区はトリノ中央駅より少し南東にある旧市街地。一番古い地区は写真上の緑樹帯の辺りで19世紀後半～20世紀初頭につくられた。

1. サンサルバリオ地区と使用建物の概要

トリノは，ピエモンテ州の州都，またトリノ県の県都で，周辺地域を含め国内第4の人口規模である約87万人を擁するコムーネである。かつては自動車メーカー，フィアットの企業城下町として，また工業都市として栄えたが，イタリア経済の陰りととともに失業者の増加や人口減が社会的な課題となっている。

サンサルバリオ地区はトリノ中央駅より少し南東の旧市街地にあり，地区人口は19,000人である。一番古い地区は緑樹帯の辺りで，この一帯は19世紀後半～20世紀初頭につくられた。現在「地区の家」として使われている建物はトリノ市の所有物で，運営団体が賃貸借の契



写真2 サンサルバリオ地区の家

1908年に建てられ，約80年間，銭湯として使われた建物。L字型平面で角入り。左が女湯，右が男湯として使われていた。



写真3. サンサルバリオ地区の家の前の小公園
地区の家の前には小さな公園があるが、ここは管理外の場所。



写真4 Parrocchia Sacro Cuore di Maria 教会
地区の家の北側、小公園を挟んで建つ教会。



写真5 入口を入ってすぐ左にあるBAR
カウンターに立っているのがサーラさん。普段は2階の運営本部にいる。心理学を勉強したが、ここでは全体プログラム作ったりソーシャル・教育関係のプロジェクトをしている。

約を結んでいる。この建物は1908年に建てられ、1944年まで約80年間、銭湯として使われた。当時は各家々には内風呂がなく、各地域に銭湯のようなシャワー施設が作られることが一般的であり、この建物はその当時の文化的遺産が今に残るものである。シャワー施設の廃業後、トリノ市の所有となっていたが、実態としては放置されており、購入者がいれば売却するつもりだったが、買い手がつかない状態であった。

建物構成はL字型平面で、角入り、左が女湯（シャワーブース群）、右が男湯となっていた（図1）。

2. 地区発展事務所の開設

（アンドレア・ボッコ教授へのインタビュー）

ボッコ教授は1990年代前半に「NGO 地区青年」という組織で働いており、アフリカに行ってハウジングを作る国際援助活動をしていた。その後、1990年半ばにアフリカ等から移民が多く来るようになったため、自分がアフリカに行くのではなく、ここトリノで、家がないアフリカ人に家を探す仕事を始めた。

当時、トリノ市内では2つの地区に移民が集中していた。一つはポルタパラッツォ（市場の辺り）地区で、もう一つがサンサルバリオ地区である。両地区とも駅に近いので、外国人が流れ込みやすかった。この2つの地区に対するトリノ市の対応は異なった。ポルタパラッツォ

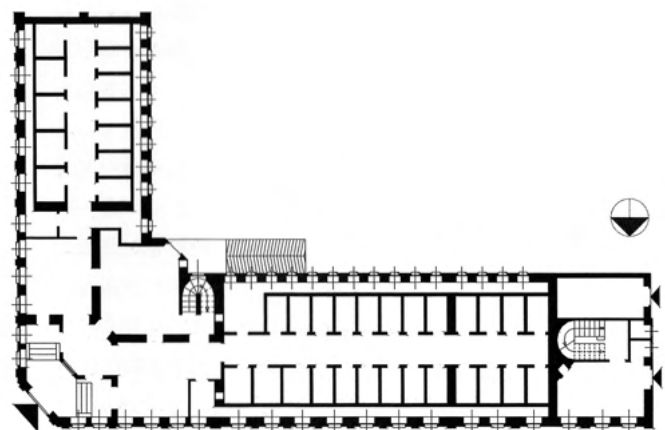


図1 公衆浴場の頃の平面図

地区はEUからのまとまった補助金が得られたのでトリノ市がプロジェクトを行った。一方、サンサルバリオ地区ではそうしたプロジェクトがなかったため、我々のNGOでやろうという手を上げた。また、サンサルバリオ地区を活動の場所として選んだのは、ボッコ教授自身が生まれたのがこの地区であり、元々の住民と移民との摩擦が生じてしまっていることについて、その解決のための調査をトリノ市から依頼されたこともきっかけの一つである。

最初の問題意識は、「移民が定着する」ことであり、「流入してくる移民との共生」であった。その時にはまだ参考になるモデルがなかったため、サンサルバリオ地区発展事務所を開設した。

自分たちのNGOが技術コンサルタントとして、エスニック・文化問題、地域経済活性化などの活動を行う。決定権のある中心メンバーとして、地域の各アソシエーションの代表に参加してもらう意思決定構造とし、実働部隊として自分たちのNGOオフィスが働く、という位置づけであった。サンサルバリオの商店街などでは、そうした地域アソシエーション活動に参加する土壌がある。

3. 「地区の家」の開設と運営

(アンドレア・ボッコ教授と運営者のアンナ氏へのインタビュー)

1) 「地区の家」の開設

1999年のNGO開設当初、サンサルバリオ地区発展事務所は緑樹帯の向こう側に開設した。そこはかつて有名な菓子店が店を構えていた場所で、「ヌテラ Nutella」というチョコレートスプレッド（ココア入りヘーゼルナッツペースト）が発明された店だった。そうした地域の誇りと文脈のある場所への敬意もあり、その場所でもカフェを出していた。この時からソーシャルかつカルチャルなスペースをもちたい、図書館もつくりたいという夢があったが（このときに話を聞こうと思っていたのがアントネッラ・アンニョリ氏）、お金もかかるため、実現できなかった。



写真6 エントランスにある看板

建物中にはいろいろな部屋があり、誰でも入れて会員登録などは必要ない。



写真7 エントランスの隣にある情報コーナー

開催されている講座内容や相談窓口に関する資料などが置かれている。



写真8 一旦中に入ってから出る、閉じた安全な中庭
中庭は子連れの家族が何をするでもなくいられる。日当たりが良く、ダンスもできる。スクリーン設置可能。

転機は2006年。イタリアにおける問題山積地区における社会的活動に対するVoderfone財団のコンペに当選し、50万ユーロの支援金をもらってこの社会的事業を始めることになった。但し、このお金は自分たちの所有物でない建物に対して使うことが想定されていなかったため、この場所が社会的で、かつ意味のある場所になる、ということを経験して説得した。結果としてコンペの採択が最終的に決定し、Voderfone財団の働きかけもあって、トリノ市が建物を2010年からの30年間貸与の契約で、また年間50ユーロのとても安い賃貸料で借してくれることになった。建物の改修も市が行ったが、公共建物のため、勝手に間仕切りや外観に手を加えられず、街路や公園に面した開口部も変更できなかった。このため、銭湯の名残で窓は高い位置にあり、エントランスも1箇

◆コラム4 サンサルバリオ地区 の家の活動プログラム

「サンサルバリオ地区の家」で行われている活動には、無料窓口サービスと有料講座がある。

右の青い冊子は生活に困った住民が聞きにくる窓口サービスのパンフレットで、これらのカウンセリングやサポートは全て無料で提供される。

一方、右の赤い冊子はコーラスやダンス講座などをリストアップした冊子で、ここに掲載された講座はすべて有料である。ただし、会場費として時間単価での費用支払いを求め、講師への謝金の有無は使用条件に問わないが、参加者が支払う費用が高額である場合には、地区の家の使用は認めていない。これらの講座は、この地域の住民がうまく他の住民と出会って何かの楽しみをともにする場を与えるためのプログラムである。何かをするように、運営者が働きかけることはなく、活動が自由に生まれていくように支援し、生まれた活動の継続と発展を支援するのが運営の仕事である。さらに、運営者スミズーラはただこれらのプログラムをオーガナイズするだけでない。いくら安くても参加するのが難しい家庭もあるので、子供を参加させるための経済的な側面も含めた支援体制もある、とのことであった。

活動プログラムをみてみよう。まず青色の無料窓口サービスには、退職者活動、Ufficio Pioの応募支援、家族情報窓口、難民の住居手配情報、移民の経済相談、訴訟に関する法律相談、人間関係の争議に関する法律相談、就労支援、青少年相談、女性相談、弱い男性のための相談、家族問題解決窓口、弱い女性のプチ起業相談、がある。

一方、有料の講座プログラムには、各種音楽・映像教室、語学講座（フランス語、英語、スペイン語、ロシア語）、ダンス教室、運動教室（ヨガ、太極拳など）、そしてアート講座がある。さらに子供用の活動もある。



写真1. プログラム冊子

左が有料の講座プログラムのリスト、右が無料の窓口プログラム。

所のままである。他に、工事業者は入札で決めないといけないというルールもある。それなりに制約のある条件で借りることができているが、公共建物で使わせてもらえる場所はさほどないため、これでも良い条件である。

一方、NGO からコーポラティーヴァ（社会的協同組合 Cooperativa sociale, →p.17）に改組した新生スミズーラではトリノ以外にも行政委託の地区改善の仕事が多くあったが、「サンサルバリオ地区の家」ができて以降、地区改善業務委託がなくなってきた。また、地区の地価が上がり、家賃も上昇して貧しい人々は住み続けることが難しくなるという、事業の成果の思わぬ波及効果もみられるようになった。そこでスミズーラを解散するか、或いは起業するか議論した末、自分たちでヴィア・バルテア（→p.94）を起業することにした。サンサルバリオ地区の家ではトリノ市の建物を実質ほぼ無料で借りて社会的機能の場として運営しているが、こうした支援なく事業を展開できるかの挑戦を行う意図もあった。

2) 「地区の家」の活動

地区の家の活動には、住民たちに活動の場を提供する役割と、社会的協同組合としての地域支援活動がある。

住民たちに活動の場を提供するため、指導的立場ではなく、住民が自分たちで活動を提案して、自らの運営の元で活動することができるように支援している（◆コラム4, →p.89）。例えば、高齢者のコーラス、中学生の補習をするコース、ポピュラーソングや子供オーケストラ、それらの活動に参加するための基礎コースもある。他にも子供用のサーカス講座、コンピュータオタク講座、パークッション講座など、多様な講座がある。様々な関心のある住民たちが共存できるよう、つまり例えば音が気にならないように部屋や時間をずらしたりしている。

地区の家としての活動は多様だが、例えば最近では、交通巡査と建築家が近くの家が雨漏りしカビが出て崩れそうだと助けを求めてきたので介入の方法を相談した。

学校や幼稚園ともコラボレーションを行っており、例えば取材日の朝は幼稚園児のために栗のお菓子づくりラボが開催されていた。このように「外の活動」が、地区の家の中に流れ込んで来る。外には選択可能な場所が必ずしも多くないので、地区の家も教育の場になっている。



写真9 カフェ

BAR を抜けた所にあるカフェは周辺のオフィスの人や学生がランチを食べにくる。講座が終わってから食べて帰る住民もいて、夕方の時間も大変賑わっている。周辺には最近になってたくさんの飲食店ができ、値段も様々である。地域にはブルジョアから庶民までいろいろな階層の人がいて、地区の家で安く飲食が提供されることで、地域の他の店舗への悪い影響はない。



写真10 講座室

平日夕方は様々な講座でほぼ満室となる。但し、以前、若者が夜に騒いで近隣から苦情が出たことがあり、騒音のでる活動には貸さないようにしている。



写真11 ボッコ教授とアンナさん

真中がアンドレア・ボッコ教授、右が創始者の一人アンナさん。左が多木さん。



写真 12 屋上広場

小学校が 16 時半に終わり 17 時前には児童で大にぎわいになる。

注 1) 新自由主義：政治や経済、哲学の分野における思想。日本語では複数の用語が同じ訳語で当てられている。①「ニューリベラリズム Social liberalism」では、個人主義・自由放任主義に基づく古典的自由主義に対して、社会的公正のもとに自由な個人や自由な市場の実現のためには政府による介入も必要であり、社会保障の充実が求められるという考え方（社会自由主義、社会的市場経済）。②「ネオリベラリズム Neoliberalism」では、社会的市場経済に対して再び個人の自由や市場原理に重きを置き、政府による個人や市場への介入を最小限に抑える考え方。1970 年以降の日本では、おおむねこちらの概念で使用される。

注 2) (参考文献 1 より抜粋、要約) 新自由主義では「小さな国家」が期待され、そこでは医療、公教育、公益事業などの分野における国家の役割は縮小され、社会のセーフティネットは切り詰められる。統合的な社会に代えて、強力な介入と権力の行使のもとに、社会はグローバルな市場に分節化される。このとき、個人は「資本の自由な合理性」のために、自己統治の義務と責任を果たすことが期待される。グローバリゼーションを絶対的要件とする「生き方の政治」に合わせられない者は容赦なく制裁され排除される競争的環境のなかで、そこを生き抜く「エージェント」としての個人である。同時に、エージェントは自らに道徳的な義務と責任を課すコミュニティに共属する。こうして、新自由主義と、本来その対抗にあるコミュニタリアニズムはことに危機的状況において、共振する関係を持ちうる。

参考文献

1) 吉原直樹, 新自由主義的な震災復興とコミュニティ戦略, 特集 2 震災復興の論理-新自由主義と日本社会-, 学術の動向 2013, <https://www.jstage.jst.go.jp/article/tits/18/10/18_10_44/_pdf>, 参照 2020.10.06

その他, いろいろなコラボレーションが行われている。

3) 「地区の家」の活動組織

サンバルバリオ地区発展事務所の母体は地元の多くの市民団体であり, 市民アソシエーションの束ね役アソシエーションとして成立している関係がある。このため, すでに存在しているたくさんのつながりをもとにした運営がなされている。様々な提案が, 地域から自然にあがってくるが, プロジェクトを通してこちらから呼び込む場合もある。こうした積み重ねを通して, 内側と外側がよくつながっていると感じている。全ての住民を対象としたインクルージョンを目的としているため, 繋がりの一例として, 学校はよい手段である。そのため, 学校や幼稚園を通じた活動は非常に重要であるとの認識がある。数年前に学校とプロジェクトを一緒に行ったところとてもうまくいったためその後もいい関係を保っており, 毎年, 学校から何か一緒にやりたいとリクエストがある。

リクエストがあれば遠くから来ても拒みはしないが, ここはサンバルバリオの「地区の家」なので, 一義的にはこの地域の人を対象に想定している。実際には, イベントを行うと別地区から来る人もいる。本来は, 各地区にこうした「地区の家」があるのが理想的であると考えている。トリノでは現在 8 カ所の「地区の家」が機能しているが, 各地区に設置するとなると 23 カ所必要になる。

4) アソシエーションと社会的協同組合

「なぜイタリアではつながりをつくらうとする場が出てきているのか?」という問いに対する, ボッコ教授の返答。

制度上, 現代社会は, 個人どうしが競争に置かれて, 敵対する社会になっている。いわゆる「新自由主義^{注 1)}」の思想のもとでは, 国と個人が経済的に直接つながる関係を持ち, 中間組織としてのコミュニティを認めない^{注 2)}。しかしイタリア社会では一緒にいることを楽しむという基本的イデオロギーを共有しており, イタリア市民には中間的コミュニティを求める感覚がある。トリノは 20 世紀から工業都市として発展し, たくさんの労働者が

流入した。こうした労働者は地盤的安定性を持たず、権力と対抗するために結束して、協働の組織体をつくった。トリノはこうした連帯の文化が育まれた街である。そのため古い地区人口 12,000 人に対して、アソシエーション（市民団体、互助会）が 500 団体もあった。これは、イタリアの一般的な街に比べてとても多い。スポーツ、文化、宗教、商店街（イベント開催）、公園掃除ボランティアなど、ありとあらゆるアソシエーションがある。

注3) アソシエーション（→ p.17）は 3 人からコムーネに登録可能で、取支決算を出す必要がある。経済的利益を生み出す活動もできるが、基本的には利益を生まない組織である。一方、社会的協同組合は企業体（会社形態）である。普通の企業は社長や役員という経営者がいて従業員は会社とは雇用関係にあるが、社会的協同組合では従業員一人一人に決定権がある。例えば、社会的協同組合が船を所有し、それに参加している漁師（会員）は組合が所有している船を使う。そして船が壊れた時には社会的協同組合で直す、或いは捕った魚を社会的協同組合で売りに行く、等の互助的組織でもある。日本では事業協同組合が相当する。

5) 「地区の家」の貸室運営

夕方以降は、「地区の家」の運営本部事務所は鍵を締

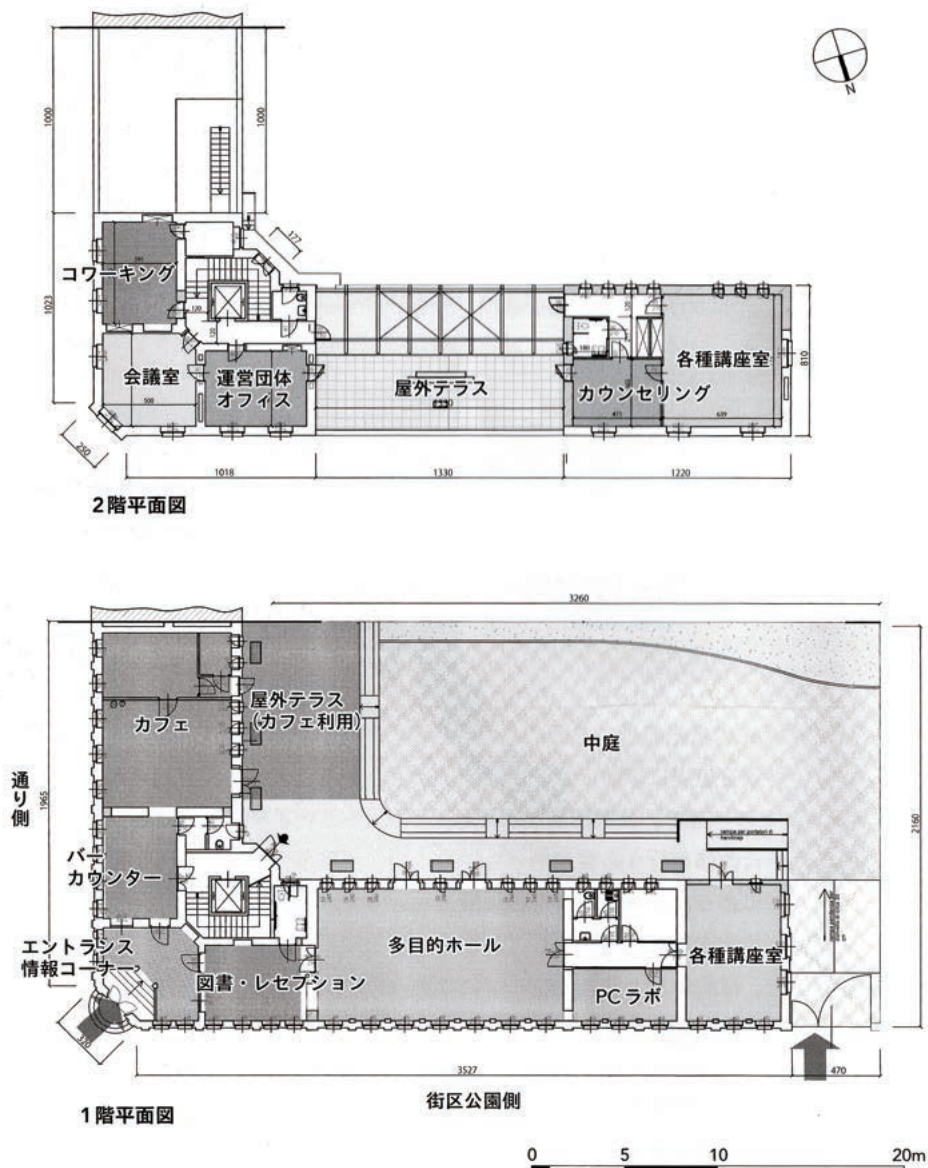


図2 サンサルバリオ改修後の平面図

図1 および図2の出典:『「地区の家」と「屋根のある広場」 イタリア発・公共建築のつくりかた』小篠隆生・小松尚著、鹿島出版会、2018



写真 13 夕方の小公園

地区の家の前にある小公園は薬物中毒者やホームレスがいたり無法状態になっている。しかしこの場所は管理下ではないため、どこまで介入するかが課題。

めているが、その後は他室は各使用団体に戸締まりを任せている。これだけ場所があり多くの人が来ているので、全ての時間帯には対応できないので、責任を課して自分たちで掃除し鍵を閉めてもらうことにしている。「自治」によって、活動時間の自由度を確保できる仕組みである。ただし、毎朝、清掃業者を入れている。利用者は講師やプログラム運営者に授業料を払い、講師らは部屋使用料を「地区の家」に払う。平日は講座開講が基本で、週末だけパーティなどにも貸し出す。使用料はとても安く、有料プログラムの場合で1時間9ユーロ、無料講座はさらに安い。子供の誕生パーティなどで午後いっぱい借りても70ユーロである。利用料の基本的な方針として、私的な活動はそれなりの金額をとり、公的な活動の場合は安く抑える。以前は、夜もパーティーで貸し出ししていたが、騒音に関して近隣住民から意見が出されたため、現在は大きな音の出る活動には貸し出しをしていない。

特に高齢者が多い地域ではないが、高齢者プログラムは多彩である。お話会、ポピュラーダンスクラブ、市民社会擁護の女性の会、おじいちゃんの会、年金生活者クラブなど。障がい児に特化した講座はないが、障がいがあつて他の場所に行きにくい子たちが、なるべく他の子と同じようにこの場に来られるようサポートしている。また、運動や乗物で怪我をしやすい活動については、その活動をする団体に独自で保険に入ってもらっている。

6) 「地区の家」の課題と将来

「地区の家」の中だけでなく、地域と連携したプロジェクトがいくつかある。例えば、fa bene ファベネ（食べ物を貧しい人にお裾分けするシステム、→p.96）をサンサルバリオ地区のマーケットでもしている。また余った食品・不要品を、それを必要とする貧しい人にONLINEでマッチングして配る活動も行っている。

今後の見通しとして、例えば30年後には、私たち現スミズーラのメンバーはもうおらず、その時の市長がどんな人かによって、街のあり方が作られているだろう。今はこうした場所が1箇所だけでなく数カ所あり、それらの間でのネットワークができているため、社会的存在として発言権が強い。このため、「地区の家」や、そこを拠点とした活動は、そう簡単にはつぶされないだろう。